

被災文化財と震災遺産を次世代に

◆ ◆ ◆ ◆ ◆
柳沼 賢治 氏

福島大学 うつくしまふくしま未来支援センター
特任准教授



あの震災から5年が過ぎた今日まで、毎日届く地元紙あるいは全国紙の地方版には「地震」・「津波」・「放射能」・「被災」・「復興」のいずれかの文字が印刷されなかった日はなかったでしょう。それほど、私たちはかつてない被災から復興への道をたどっているのだということを再認識させられます。東日本大震災における福島県は、地震自体の被害だけでなく、津波そして福島第一原子力発電所の事故を含む複合災害に遭った点が際立った特徴です。従って、被災の状況は多様であり、復興の歩みも地域によって大きく異なっています。

災害からの復興では、日常生活を支えるインフラの整備・経済活動の復旧が優先されるのは自明ですが、東日本大震災における白河市の小峰城や4月の熊本地震で石垣が崩落した熊本城の痛々しい姿を見た地域の人々の落胆ぶりには、想像を超えるものがあります。これは、文化財がそこに住む人々のアイデンティティに大きくかかわっていることを示しており、地域の人々にとって文化財の復興もまた求められていることを実感しています。

東日本大震災直後、後にFUREの歴史資料保全支援担当になる教員を代表として、旧財団法人福島県

文化振興事業団・福島県立博物館・福島県史学会などからなるボランティア組織

の「ふくしま歴史資料保存ネットワーク」が中心となり、主として中通りの被災文化財の救出が始まりました。警戒区域への一時立ち入りができるようになった2012年度からは、「福島県被災文化財等救援本部」が中心となり、警戒区域の資料館に残されていた資料の救出作業も始まり、今年5月24日に、双葉町歴史民俗資料館から最後の資料を選び出して終了し、一定の段階を迎えました。

警戒区域から救出された資料は、相馬市にある一時保管施設へ運ばれ、薫蒸の上、白河市の福島県文化財センター白河館「まほろん」に建設された仮保管施設に搬入されています。ただし、いずれも一時保管と仮保管を目的とした施設であり、救出されたこれらの文化財を、今後、どのように保全し利活用していくのかという中長期的な見通しはまだまだなく、民俗文化財や天然記念物、自然史資料、個人所蔵の史資料などに関しても今後の大きな課題です。

一方、2014年度から、福島県立博物館に設置された「ふくしま震災遺産保全プロジェクト」の実行委員会によって、津波で折れ曲がった看板や地震の時刻で止まった時計など、被災の実態を伝える「震災遺産」の調査と収集、保全への取り組みも行われています。

現在、福島県では震災の教訓を伝えるアーカイブ拠点施設の建設が計画されています。被災文化財や震災遺産の保全と次世代への継承が期待されるこの施設は、世界のフクシマの発信元として、質の高い整備をしていかなければなりません。そこにこそ、専門的なスタッフと情報を持った福島大学の果たす役割があると考えています。



文化財の救出作業（双葉町歴史民俗資料館）



福島県文化財センター白河館敷地内の仮保管施設

※このコーナーは、福島の被災者と被災地域の復旧・復興を科学的・学術的見地にに基づき支援している福島大学「うつくしまふくしま未来支援センター（FURE）」のスタッフによる寄稿です。
科学的データを基にした福島県の産業や環境の現状、FUREの取り組み、直面している課題などを、約20回にわたり連載し、より正確な福島県情報をお届けします。